

実用日本語語彙から見た多義語

類別再編、現代実用国語辞典 実用日本語の語彙と文字・表記（４）

Polysemous Words in Practical Japanese Vocabulary

西原 一幸

Kazuyuki NISHIHARA

第一稿

- 一. はじめに 二. 資料と方法 三. 語彙（品詞、語種）

第二稿

- 四. 語彙（同音語）

第三稿

- 五. 語彙（同形語）

本稿

- 六. 語彙（多義語）

以下次号

- 七. 語彙（対義語、同義語、略語、転義語、比喻語）
八. 文字・表記

（附言）本稿は「〔データ集〕類別再編、現代実用国語辞典、実用日本語の語彙と文字・表記（１）」¹⁾、「同（２）」²⁾「同（３）」³⁾として発表した小論の続稿である。ただし、前稿とは記述方法が異なるので〔データ集〕の語は除外した。

論述の都合上、第一稿に記した本稿の目的と資料の解説（要旨）とを以下に再録する。本稿は以下のような考え方に立っている。

いうまでもないことだが、国語辞典の項目は、見出し語を五十音順に配列し、かな見出し、漢字見出し、語釈という順序で記述してある。利用者は、豊富な単語群の中から目的の語を拾いだして利用する。だが残念なことに、利用者の多くは収録されている語の全体に目を向けることはほとんどない。国語辞典は、そのような利用に供するだけでもったいないほどの多様な情報を含んでいる。そのような情報の中から、語の後接要素だけを取りだして利用しようとしたのが、近年盛行した逆

引き辞典の類である。

本稿は、山岸徳平編『清水新国語辞典』（平成二年十月、清水書院刊）本文の記述全体の内容を細かく分解し、これに表題の観点から類別再編を施すことによって、国語辞典が内包する豊富な潜在情報の全体を顕在化させようとするものである。

大型辞典に比べれば、53,237語の見出し語（字）を収録した『清水新国語辞典』は決して大分な国語辞典だとはいえない。だが現代日本の日常生活に役立terるという観点からすれば、本辞典は必要にして十分な語彙量をもつ実用国語辞典だといえる。現代の節用集だといってもよいだろう。それゆえ、本辞典に対して上述のような分類再編を加えることは、実用レベルで用いられる日本語語彙の全体を分類再編することになる。（中略）

計量国語学的データを網羅収集した書物に、林大監修、宮島達夫他編『図説日本語』⁴⁾がある。だが本稿で示される種類のデータは収集されていない。（中略）

データの基礎となった『清水新国語辞典』の概略を簡単に説明しておく。本辞典は前著『清水国語辞典』を改訂して平成二年に初版が出た。その後、現在まで版を重ねている。本文総頁数1,026頁（本文総文字数2,593,600字、記号を含む、実測）、収録見出し語（字）数は53,237語（字）（実測）である。本辞典は印刷本の他に電子版が出ている⁵⁾。本稿が基礎としたのは、この電子版から本文部分をテキストファイルとして取りだし、必要な箇所を修正を加えて作った解析用テキストである。本稿はこうして作ったプレーンテキストに、関数による文字列操作を加えて必要な結果を得ている（中略）。

修正後の本稿の基礎となった見出し語数は、全部で51,249語となる⁶⁾。

当然のことながら、本稿では基礎となった『清水新国語辞典』の内容に一切改変を加えていない。ただし、漢和辞典としての語釈形式をもつ例で、除外しなかった例⁷⁾の中には、他例との整合性を保つために修正を加えたものがある。（中略）

以上の他、気づいた限りで明白な誤記・誤植は訂正した⁸⁾。さらに分類再編の都合上、原本にはない語種情報（字音語・和語・混種語・外来語・和製英語）をつけ加えた⁹⁾。

六. 語彙（多義語）

1. はじめに

本稿では多義語を取り上げる。管見の限り、現代日本語語彙の全体を分析対象とした多義語の論考を知らない。そのわけは、これまで語彙分析の主要資料となってきた新聞雑誌や文学作品などには意味の記述がないからであろう。その点、清水国語辞典は辞書であるから詳細な意味記述があり、多義語の計量的分析に適している。

多義語とは、国広哲弥によれば「意味的に関連付けられる二つ以上の意味を持つ語」「分かり易く言えば辞書で番号を用いて二つ以上の意味が記述されている語」ということになる¹⁰⁾。だが辞書が語義を記す場合には、どこまでを同一語の別義とみるのか、同音の異義語とみるのか、判断が難しい。例えば国広は、『三省堂国語辞典第三版』記載の「きく」の例を取り上げ次のように述べている。

きく〔聴く〕

- ①くわしく・（注意して）きく。「講義を一・国民の声を一」
- ②音楽をきく。「クラシックを一」

きく〔聞く〕

- ①音・声を耳に感じて知る。「一も〔=聞く人も〕なみだ、語るもなみだ」
- ②聞き入れる。「言うことを聞け」
- ③〔道を〕たずねる。
- ④味やかおりのをのぐあいを判断する。「味を一・酒を一」

このうち〔聴く〕の例では、②の「音楽を」の部分は「文脈の意味を取り込んだものであるから、別義として認める必要はない」とし、〔聞く〕の例の③④は、①との意味的隔たりが大きく「同音異義語としてもよいように思われよう」としている。

これに対して『清水新国語辞典』では、

きく（聞く-聴く）

- (1)音や声を耳で感じる。
- (2)言われた内容を受け入れる。承知する。
- (3)質問する。たずねる。
- (4)味や香りの良い悪いを調べる。

のようであり、三省堂国語辞典のように漢字表記の「聞く」「聴く」を区別せず、二者を同一語と見ている。

このように多義語といっても辞典により語義の分類に温度差があり、また語を扱う個人にとっても判断が異なる場合がある。そういう意味で、本稿の示す結果は、厳密に言えば『清水新国語辞典』における多義語の集計ということになる。だがその一方、辞書というものは先行辞書を参考にして編纂するのが通例であり、上述二辞書の語義記述が類似している点からも分かるように、『清水新国語辞典』の語義説明だけが他から大きく乖離しているということは考えにくい。したがって大局的に見れば、『清水新国語辞典』の示す多義語の実態は大部分の国語辞典の実態であり、かつそれは現代实用日本語語彙における多義語の実態であると見なしてよいであろう。

本稿では、『清水新国語辞典』が複数の語義を番号で区分して記している語を多義語とする。本稿の目的は、以下のような問いに数値としての解答を与えることである。

1. 最も多義である語はどの語か。
2. 实用日本語語彙全体において多義語の占める割合はどのくらいか、単義語の占める割合はどのくらいか。
3. 多義と品詞との関係はどうなっているか。
4. どのような語種に多義語が多いか、単義語が多いか。
5. 語種別（和語、漢語、混種語、外来語）に見たとき、最も多義である語種はどれか。

2. 最も多義である語はどの語か

最も多義である語はいかなる語であろうか。それは「とる（取る）」である。以下にその詳

細を示す。

とる 取る

[他五] (1)手に持つ。つかむ。にぎる。▽手を一。(2)手であつかう。▽船のかじを一。(3)とり除く。▽草を一。(4)むりやりにうばう。▽人の財布を一。(5)ぬぐ。▽帽子を一。(6)消す。なくす。▽痛みを一。(7)掌握(しようあく)する。▽天下を一。(8)嫁(よめ)・婿(むこ)などを迎える。(9)師として学ぶ。主人として仕える。▽師を一。(10)芸事などを人に教える。▽弟子を一。(11)客に買われてつとめる。▽客を一。(12)料理などを注文する。▽すしを一。(13)定期的に購読する。▽新聞を一。(14)徴収する。▽税を一。(15)許可などを得る。▽免許を一。(16)引き受けておこなう。▽仲介の労を一。(17)負う。身に受ける。▽責任を一。(18)書きしるす。▽メモを一。(19)解釈する。理解する。▽悪く一。(20)気に入るようにする。▽きげんを一。(21)予約する。▽席を一。(22)おちつく。▽宿を一。(23)時間・場所・労力などを必要とする。▽手間を一。(24)すもうをする。▽一番一。(25)かるた遊びをする。▽かるたを一。(26)分ける。移す。▽料理を小皿に一。(27)積む。重ねる。▽年を一。(28)賃金・給料としてもらう。▽月給を一。一に足(た)りない とりたてて言うまでもない。つまらない。価値がない。一ものも取りあえず いそいでいるようす。あわただしいようす。

この語、「とる(取る)」が『清水新国語辞典』記載の見出し語53,237語中、最も多義である¹¹⁾。「(1)手に持つ。つかむ。にぎる。」から「(28)賃金・給料としてもらう。」まで28の語義を区分している。この語がおそらく実用日本語彙中でも、最も多義である蓋然性が大きい。

「取る」に次ぐ多義語は「手」である。「手」は21の語義を持つ。

て 手

[1][接頭] (1)自分の手でしたことをあらわす。▽一料理・一製。(2)手で持てる程度の意をあらわす。▽一帳・一鏡。(3)状態をあらわす語について語調を強める。▽一ぬるい・一痛い。[2][接尾] (1)動作をあらわす語について、その動作をするものをあらわす。▽読み一・書き一。(2)体言について、種類・品質・方面などをあらわす。▽一番一・おく一・上一。(3)代金。▽酒一。[3][名] (1)人間の肩から両がわにのびている部分。うで。▽一を上げる。(2)手のひら。▽一を合わせる。(3)植物のつるなどをささえ保っているもの。▽豆の一。(4)器具・機械などの手でつかんで動かす部分。とって。▽フライパンの一。(5)必要な人員。▽一がたりない。(6)部下。配下。▽一の者。(7)字の書き方のじょうずへた。▽一がよい。(8)うでまえ。手腕。▽一が上がる。(9)手段。方法。▽あの一、この一。(10)はかりごと。計略。▽相手の一の中を見抜く。(11)手数。世話。▽一がかかる。(12)関係。かかりあい。▽一を切る。(13)種類。▽この一の品。(14)勢いよく起こるもの。▽火の一があがる。(15)きず。負傷。▽一を負う。(16)風。▽追い一。一が切(き)れる 関係がなくなる。一が切(き)れるような ま新しい紙幣のたとえ。一がこむ さいくがこみいっている。さいくが念入りである。一が出(で)ない 自分の力ではどうにもならない。一が届(とど)く それに近づく。▽六〇歳に一。一がない (ア)なすべき方法がない。(イ)する人がいない。一が長(なが)い ぬすみせがある。一に汗(あせ)を握(にぎ)る ひやひやする。はらはらする。一に余(あま)る

自分の力ではどうすることもできない。もてあます。一に入(い)れる 自分のものにする。一に負(お)えない 「手にあまる」に同じ。一につかない 心が他の事にうばわれていて仕事ができない。一にとるよう 手に取って見るようにはっきりしているようす。▽話し声が一に聞こえる。一に乗(の)る 相手のたくらみにひっかかる。一のほどこしよう 手のつけよう。▽伝染病がはやって、医者も一がない。一も足(あし)も出(で)ない 相手の力がまさっているの、どうすることもできない。一を上(あ)げる (ア)自分の力ではどうにもならないで困ってしまう。(イ)降参する。まいる。一を打(う)つ (ア)方法をくふうする。(イ)仲なおりする。一を貸(か)す 力をそえて助けてやる。一を変(か)え品(しな)を変え 次から次へと手段をかえてころみること。一をこまぬく (ア)うでぐみをする。(イ)なにもしないでいる。(ウ)手出しをしない。一をつかねる 「手をこまぬく」に同じ。一を尽(つ)くす できる限りの方法をころみる。一を握(にぎ)る (ア)協力して物事をおこなう。(イ)なかなおりする。一を抜(ぬ)く 手数をはぶいて、いいかげんにすます。一を延(の)ばす 事業などの範囲(はんい)を広げる。一を引(ひ)く (ア)手をとってみちびく。▽老人の一。(イ)関係を断つ。▽この問題から一。一を回(まわ)す (ア)前もって準備をととのえておく。(イ)あちこち手をつくしてさがす。一を焼(や)く もてあます。処置に困る。

以下、これに続く多義語で、12義までの語義を持つ語の見出し語だけを例示する。

19義 たつ (立つ)、

18義 きる (切る)、あたる (当たる)、つける (付ける-附ける)

16義 はる (張る)、あげる (上げる)

14義 ひく (引く)、あがる (上がる-騰がる)

13義 に (*) [格助詞] [接続助詞]

12義 みる (見る)、きれる (切れる)、あてる (当てる)、おちる (落ちる)、つく (付く-附く)、かける (掛ける-懸ける)、め (目-眼)、ところ (所-処)

ここで注意すべきことは、28義から12義までの語義を持つ語、つまり最も多義である上位19語が、すべて和語であることである。この点は後述する。

3. 多義語と単義語の割合

『清水新国語辞典』中の多義語と単義語の割合はどのようなであろうか。以下にそれを示す。

単義語 36,948語 (72%)

多義語 14,301語 (28%)

(合計) 51,249語

本辞典の記載例を見ればわかるように、『清水新国語辞典』は(1)～(28)の数字を用いてすべての語義を区分している。そこで、これらの数字を以て区分される文字列の区画が本辞典全体でいくつあるかを計測すれば、『清水新国語辞典』が記載している語義の総数が分かる。それによれば、その数は71,603である。つまり本辞典は51,249語の見出し語の持つ71,603の語義を記載していることになる。これを用いれば、単義語、多義語それぞれが分担している語義の割

合がわかる。以下にそれを示す。

- 単義語 36,948義 (52%)
- 多義語 34,655義 (48%)
- (合計) 71,603義

『清水新国語辞典』が実用日本語の実相を反映しているとすると、実用日本語には71,603の意味区分があり、単義語と多義語とはそれらの約半数ずつを受け持っていることになる。

それでは14,301語の多義語は、それぞれどのような割合で語義を分担しているのでしょうか。先に見たように、その最多は「取る」の28義である。表1にそれを示す。

当然のことながら、2義(2個の語義)を表す単語が最も多く、10,591語(74%)である(下から二段目)。3義を表す語は2,542語(18%)で(下から三段目)、2義を表す語の四分の一にまで急減する。この表からすれば、大多数の多義語は2義から、多くても5義くらいまでの語義を担っていると見て良いであろう。反対に28義から6義を担う多義語はきわめて少ない(243語、1.7%)。

4. 複数の品詞を持つ多義語

多義語の中には、意味が変われば品詞も変わる語がある。以下のような例がそれである。

語義数	語数
28	1
21	1
19	1
18	3
16	2
14	2
13	2
12	7
11	11
10	12
9	16
8	33
7	56
6	96
5	243
4	682
3	2,542
2	10,591
(合計)	14,301語

[表1]

失敬(しっけい)

- [1] [名][形動][自サ] 人に対して敬意を欠くこと。失礼。▽一人だ。
- [2] [名][自サ] 別れること。▽これで一する。
- [3] [名][他サ] 他人の物をだまって自分のものにする。

上例では同一語形の品詞が、[1]の意味では名詞・形容動詞・自動詞サ変、[2]の意味では名詞・自動詞サ変、[3]の意味では名詞・他動詞サ変となる。このように、『清水新国語辞典』は[1][2]から最長[1]～[4]までの番号を以て意味に対応する品詞を区分している。このような語は多義語14,301語の内の686語(4.8%)を占める。

品詞の組み合わせパターンは多様で、144種の組み合わせパターンが見られる。最も多いのが名詞・副詞([1][名][2][副])の組み合わせで、見出し語「露(つゆ)」をはじめとして91例を数える。以下に、「品詞の組み合わせパターン([1]～[4])」「見出し語」「例数」を例数の多い順に列挙する。

- [1][名][2][副] 露(つゆ) 91、[1][名][2][接尾] 椀-碗(わん) 37、[1][名][2][形動] 罪(つみ) 33、[1][自五][2][他五] 引っ込む(ひっこむ) 30、[1][名][2][名][自サ] 中和

(ちゅうわ) 29、[1][他五][2][自五] 聞こし召す (きこしめす) 25、[1][名][2][代] 奴 (やつ) 24、[1][名][2][接頭] 野 (の) 23、[1][名][2][名][他サ] 端倪 (たんげい) 21、[1][名][自サ][2][名] 近回り (ちかまわり) 18、[1][名][形動][2][名] 俄 (にわか) 16、[1][名][他サ][2][名] 御迎え (おむかえ) 15、[1][形動][2][名] 臍 (おぼろ) 14、[1][自サ][2][他サ] 利する (りする) 14、[1][副][2][名] 元来 (がんらい) 14、[1][名][2][造語] 鬱 (うつ) 14、[1][副][2][感] 成る程 (なるほど) 10、[1][自下一][2][他下一] 吹き付ける (ふきつける) 9、[1][名][2][名][形動] 真面目 (しんめんもく) 9、[1][名][形動][2][副] 直 (じき) 8、[1][形動][2][副] 生憎 (あいにく) 7、[1][副][2][形動] 碌碌 (ろくろく) 7、[1][自上一][2][他上一] 報じる (ほうじる) 6、[1][他サ][2][自サ] 熱する (ねっする) 6、[1][他下一][2][自下一] 押し寄せる (おしよせる) 6、[1][接][2][感] 扱-扱-偕 (さて) 5、[1][接尾][2][名] 様 (さま) 5、[1][代][2][名] 彼 (かれ) 5、[1][名][他サ][2][形動] 大振り (おおぶり) 5、[1][格助][2][接助]* (に) 4、[1][造語][2][名] 古 (ふる) 4、[1][代][2][感] 何 (なに) 4、[1][名][2][感] 御免 (ごめん) 4、[1][名][自サ][2][副] 兎角-兎角 (とかく) 4、[1][名][自サ][2][名][他サ] 落籍 (らくせき) 4、[1][名][造語][2][接尾] 性 (しょう) 4、[1][名][他サ][2][名][自サ] 差し引き (さしひき) 4、[1][接助][2][終助] * (のに) 3、[1][接頭][2][接尾] 薄 (うす) 3、[1][接頭][2][名] 取り (とり) 3、[1][副][2][接] 尚-猶 (なお) 3、[1][名][2][形動][3][副] 大変 (たいへん) 3、[1][名][2][副][自サ] 終始 (しゅうし) 3、[1][連語][2][接] 以て (もって) 3、[1][格助][2][接助][3][終助]* (って) 2、[1][感][2][名] 否 (いな) 2、[1][感][2][名][自サ] bye-bye (バイバイ) 2、[1][自五][2][補動] 行く-往く (ゆく) 2、[1][終助][2][感]* (なあ) 2、[1][終助][2][副助]* (ぞ) 2、[1][接][2][接助]* (ところで) 2、[1][接][2][副] 将 (はた) 2、[1][他五][2][補動] 遊ばす (あそばす) 2、[1][他上一][2][自上一] 安んじる (やすんじる) 2、[1][代][2][副] 其方此方 (そちこち) 2、[1][副][2][接尾]* (ぽっきり) 2、[1][副][2][連体] 可惜 (あたら) 2、[1][副][自サ][2][名]* (もやもや) 2、[1][副助][2][終助]* (やら) 2、[1][副助][2][接助]* (なり) 2、[1][名][2][接助] 所-処 (ところ) 2、[1][名][2][接頭][3][接尾] 気 (け) 2、[1][名][2][副][形動] 一所懸命 (いっしょけんめい) 2、[1][名][2][名][形動][他サ] 邪魔 (じゃま) 2、[1][名][形動][2][接頭] 生 (なま) 2、[1][名][形動][2][名][他サ] 多用 (たよう) 2、[1][名][自サ][2][名][形動] 和順 (わじゅん) 2、[1][名][自他サ][2][名] 集合 (しゅうごう) 2、[1][名][自他サ][2][名][形動] open (オープン) 2、[1][名][他サ][2][副] 一倍 (いちばい) 2、[1][連体][2][感] 其の (その) 2、[1][格助][2][終助]* (の) 1、[1][格助][2][接助][3][間助][4][終助]* (や) 1、[1][格助][2][副]* (より) 1、[1][感][2][終助][3][間助]* (ね) 1、[1][感][2][接]* (さては) 1、[1][感][2][副]* (ああ) 1、[1][係助][2][接助][3][終助]* (も) 1、[1][形][2][接尾] 易い (やすい) 1、[1][形動][2][感] 天晴 (あっぱれ) 1、[1][形動][2][接] 尤も (もっとも) 1、[1][自下一][2][補動] 切れる (きれる) 1、[1][自五][2][他五][3][連体] 去る (さる) 1、[1][自五][2][連体] 来る (きたる) 1、[1][自四][2][補動] 候 (そうろう) 1、[1][助動][2][接尾]* (らしい) 1、[1][助動][2][連語][3][接]* (じゃ) 1、[1][接][2][格助][3][接助][4][副助]* (して) 1、[1][接][2][助動]* (なら) 1、[1][接][2][接尾] 旁 (かたがた) 1、[1][接][2][副助]

* (だって) 1, [1] [接助] [2] [格助] * (とて) 1, [1] [接助] [2] [終助] [3] [連語] [4] [接尾]
 * (とも) 1, [1] [接助] [2] [副助] * (たり) 1, [1] [接頭] [2] [接尾] [3] [名] 手 (て) 1, [1]
 [接尾] [2] [自五] * (ふる) 1, [1] [接尾] [2] [造語] - 貼 (- ちょう) 1, [1] [接尾] [2] [名] [他
 サ] 加減 (かげん) 1, [1] [造語] [2] [代] 何 (なん) 1, [1] [造語] [2] [副] full (フル) 1, [1]
 [他下] [2] [接尾] 兼ねる (かねる) 1, [1] [他下] [2] [補動] 立てる (たてる) 1, [1] [代]
 [2] [感] [3] [副] 此れ-之れ-是 (これ) 1, [1] [代] [2] [形動] [自サ] 彼方此方 (あちこち) 1,
 [1] [副] [2] [接助] 折柄 (おりから) 1, [1] [副] [2] [造語] 万 (ばん) 1, [1] [副] [2] [副]
 [感] * (まあまあ) 1, [1] [副] [2] [副] [自サ] * (だらだら) 1, [1] [副] [形動] [2] [感] 左様-然
 様 (さよう) 1, [1] [副] [自サ] [2] [形動] * (ゆるゆる) 1, [1] [副] [自サ] [2] [副] * (こって
 り) 1, [1] [副] [他サ] [2] [副] * (ばたばた) 1, [1] [副助] [2] [接] * (でも) 1, [1] [名] [2]
 [感] [3] [造語] no (ノー) 1, [1] [名] [2] [係助] 外-他 (ほか) 1, [1] [名] [2] [形動] [3] [他
 サ] over (オーバー) 1, [1] [名] [2] [形動] [3] [副] [4] [接尾] 余り (あまり) 1, [1] [名] [2]
 [形動] [3] [副] [自サ] * (がらがら) 1, [1] [名] [2] [自サ] 代償 (だいしょう) 1, [1] [名] [2]
 [接] 抑 (そもそも) 1, [1] [名] [2] [接頭] [3] [感] 糞 (くそ) 1, [1] [名] [2] [接頭] [3] [接
 尾] [4] [造語] 差し (さし) 1, [1] [名] [2] [代] [3] [感] 己 (おのれ) 1, [1] [名] [2] [副] [3]
 [感] 只今-唯今 (ただいま) 1, [1] [名] [2] [副] [3] [接] 唯-徒-只 (ただ) 1, [1] [名] [2] [副
 助] 程 (ほど) 1, [1] [名] [2] [名] [自他サ] pass (パス) 1, [1] [名] [2] [名] [副] [自サ] 大
 拳 (たいきょ) 1, [1] [名] [形動] [2] [造語] fair (フェア) 1, [1] [名] [形動] [2] [代] 不肖
 (ふしょう) 1, [1] [名] [形動] [2] [名] [自サ] 反対 (はんたい) 1, [1] [名] [形動] [自サ] [2]
 [感] 失礼 (しつれい) 1, [1] [名] [形動] [自サ] [2] [名] [自サ] [3] [名] [他サ] [4] [感] 失敬
 (しっけい) 1, [1] [名] [自サ] [2] [感] * (おさらば) 1, [1] [名] [自サ] [2] [形動] 推参 (すい
 さん) 1, [1] [名] [自サ] [2] [副] [形動] 相当 (そうとう) 1, [1] [名] [接尾] [2] [造語] 献
 (こん) 1, [1] [名] [他サ] [2] [感] 謹聴 (きんちょう) 1, [1] [名] [副] [2] [名] 大略 (たいりゃ
 く) 1, [1] [連語] [2] [感] 何の (なんの) 1, [1] [連語] [2] [他五] 為て遣る (してやる) 1, [1]
 [連語] [2] [代] 其の方 (そのほう) 1, [1] [連語] [2] [副] 何とか (なんとか) 1, [1] [連体] [2]
 [副] 物の (ものの) 1、

5. どのような語種に多義語が多いか、単義語が多いか。

多義語・単義語を語種別に見ると単義語、多義語の割合はどのような比率になるのであろう

語種	語数	単義語数	多義語数	単義語比率(%)	多義語比率(%)
字音語	27,805	21,752	6,053	78	21
和語	16,293	9,889	6,404	60	39
外来語	3,722	2,656	1,066	71	28
混種語	3,315	2,547	768	76	23
和製英語	114	104	10	91	8
(合計)	51,249	36,948	14,301	72	27

表 2

か。表2にそれを示す。

この表の示すところは次のようである。右端〔語種〕は『清水新国語辞典』の収録語の語種区分であり、〔語数〕はその語種に該当する単語数である¹²⁾。以下、第一行目の字音語に例をとって説明する。

字音語は『清水新国語辞典』51,249語の内の27,805語〔語数〕を占め、他の語種に比べると最も多い。この字音語の内、単義語となっている字音語は21,752語〔単義語数〕であり、それは字音語全体の78%〔単義語比率〕にあたる。また多義語となっている字音語は6,053語〔多

語義数	語種	語数	総語数
	和語	1	
28	(合計)		1
	和語	1	
21	(合計)		1
	和語	1	
19	(合計)		1
	和語	3	
18	(合計)		3
	和語	2	
16	(合計)		2
	和語	2	
14	(合計)		2
	和語	2	
13	(合計)		2
	和語	7	
12	(合計)		7
	和語	9	
	混種語	2	
11	(合計)		11
	和語	11	
	外来語	1	
10	(合計)		12
	和語	15	
	字音語	1	
9	(合計)		16
	和語	30	
	字音語	1	
8	(合計)		31
	和語	50	
	字音語	3	
	外来語	2	
7	(合計)		55

語義数	語種	語数	総語数
	和語	81	
	字音語	8	
	外来語	2	
	混種語	1	
6	(合計)		92
	和語	166	
	字音語	38	
	外来語	23	
	混種語	6	
5	(合計)		233
	和語	463	
	字音語	133	
	外来語	58	
	混種語	34	
4	(合計)		688
	和語	1,416	
	字音語	791	
	外来語	228	
	混種語	111	
3	(合計)		2,546
	字音語	5,078	
	和語	4,144	
	外来語	752	
	混種語	614	
	和製英語	10	
2	(合計)		10,598
	(総合計)		14,301

表3

義語数)であり、それは字音語全体の21%〔多義語比率〕にあたる。

これを見ると、和語が多義語となる比率が最も大きく、字音語の1.9倍、外来語の1.4倍、混種語の1.7倍であることがわかる。どの語種よりも和語に多義語が多いと言える。この事実、語義数別に語種を集計してみるともっと鮮明になる。表3にそれを示す。

表3は意味記載の多い順に(語義数の多い順に)どんな語種が該当するかを集計した一覧表である。表冒頭、最上段2行を例に説明する。

右端の〔語義数〕28というのは、語義が28義しるされた多義語という意味である。その語は和語で〔語種〕、それに該当する語は1語〔語数〕である。語義数28に該当する他の語種はなく、この1語のみである〔総語数〕。

これに該当する具体例が、先に紹介した「取る」である。その次の〔語義数〕21に該当するのが「手」で、以下19義「立つ」から、12義「見る」「切れる」「当てる」「落ちる」「付く-附く」「掛ける-懸ける」「目-眼」「所-処」までは既に紹介した。いずれもすべてが和語である。

和語以外の語種が現れるのは語義数11になってからである。語義数11には混種語が2語登場する。その語は「通じる」¹³⁾「投じる」¹⁴⁾である。

語義数10には外来語が登場する。その語は「ピッチ (pitch)」¹⁵⁾である。

字音語が登場するのは語義数9になってからである。その語は「座」¹⁶⁾である。

以下、和語に混じって他の語種も徐々に登場するようになる。語義数8では字音語が1語、「点」¹⁷⁾が登場する。語義数7では字音語が3語、「軸」「番」「自然」が登場する。併せて外来語が2語、「セット (set)」「バック (back)」が登場する。

この表で重要なことは、3義以上の語義を担う多義語は、和語が圧倒的に多いという事実である。和語と字音語の語義数が拮抗し逆転するのは、最後の2義になってからである。この事実からすれば、実用日本語語彙の多義語の主役は和語だと言っても過言ではない。

6. 結語

以上、『清水新国語辞典』の語義記述に着目し、それを集計し観察した。結果は数値で示した。結論は繰り返さない。

和語というものは本来、その語の指し示す意味範囲が広く(概念の未分化)、反対に、例えば字音語の元となった漢語(Chinese)は語の指し示す意味範囲が狭い(具体的¹⁸⁾)。和語に多義語が多いという事実は、そのことに関係があるであろう。歴史的に見れば、日本語は漢語を受容することによって訓としての和語の意味を細分化し、それらを同音異義語として独立させてきた。だがそれでもなお依然として、多義語の主役は和語であり続けている。

-
- 1) 『東海学園女子短期大学国文科創立三十周年記念論文集 言語・文学・文化』(平成十年四月和泉書院刊)所収
 - 2) 「(データ集) 類別再編、現代実用国語辞典—実用日本語の語彙と文字・表記(2)」(『金城学院大学論集』国文学篇45号、2003/3/30)所収
 - 3) 「(データ集) 類別再編、現代実用国語辞典—実用日本語の語彙と文字・表記(3)」(『金城学院大学論集』国文学篇46号、2004/3/30)所収
 - 4) 昭和五十七年二月、角川書店刊
 - 5) テグレット技術開発刊
 - 6) 本辞典は国語辞典でありながら、単語の他に、単字の漢字をも見出し字として掲げ、これに字積(語積ではなく)を施すという漢和辞典の体裁を混在させている。本辞典がこのような体裁をもつのは、体裁の不統一ではなく本辞典の方針によるのだが、本稿にとっては不都合なので修正を加えた。その結果、見出し語数は原本

- より1,988項目減少した。詳しくは注1参照。なお本稿のこの項目数は、新たな修正が加わり、第一稿から第三稿までに用いた1,986項目より二つ多い。
- 7) 字釈を持ち、漢和辞典形式で掲出されている見出し字も、たとえば「がく(額)」「あい(愛)」などは単語であるから削除せず、字釈を語釈の形式に転換した。詳しくは注1参照。
 - 8) 構う(かまう)・象る(かたどる)・寄せる(よせる)など、14の動詞がサ変動詞とされているのを本来の活用型に修正した。また、呼称(こしょう)・陳列(ちんれつ)・作業(さぎょう)の品詞項目が動詞のみになっているので、動詞・名詞併記の他の語にあわせて、名詞も付加した。
 - 9) 字音語は文字通り字音で読む語で、漢語とは異なる。従って「悠悠自適(ゆうゆうじてき)」「取捨選択(しゅしゃせんたく)」「奇想天外(きそうてんがい)」などのような和製漢語を含むのはもちろん、「大根(だいこん)」「返事(へんじ)」「火事(かじ)」「立腹(りっぷく)」など、本来和語だった語に漢字が当てられ、現在では反省を経なければ和語だとわからないような語(字音語化した語)も含む。ただし「仕事(しごと)」の「仕」の部分のように、明らかに当て字だとわかる語は、本来の語種を表記した。
 - 10) 国広哲弥「語義研究の問題点、多義語を中心として」(宮地裕編『日本語学』特集テーマ別ファイル(2)意味Ⅱ』明治書院刊2005年6月所収)
 - 11) 『清水国語辞典』では本来は同源である「とる」に当てられる漢字表記の違いを別語とみなしている。
 - とる(採る)[他五](1)取り入れる。収穫する。▽葉草を一。(2)採用する。受け入れる。▽卒業生を一。(3)みちびき入れる。▽光を一。
 - とる(執る)[他五](1)手に持つ。▽筆を一。(2)あつかう。とりおこなう。▽事務を一・政権を一。
 - とる(撮る)[他五]写真をうつす。
 - とる(捕る)[他五]つかまえる。罪人をつかまえる。狩りのえものをつかまえる。
 - 12) この表の数字は第一稿において示した語種別の数字とは小異がある。それはそれ以後語種を修正した語があるからである。
 - 13) 1とおる。かよう。▽運河が一。(2)とどく。達する。▽都に一道・まごころが一。(3)理解される。▽ことばが一。(4)つながる。連絡する。▽電話が一。(5)ある物事にくわしい知識がある。▽経済に一。(6)敵方と関係をもつ。内通する。▽敵と一。(7)男女がひそかに関係する。▽人妻と一。(8)大小便が出る。[2](1)とおす。かよわず。▽電流を一。(2)相手に伝える。とどかせる。▽来意を一。(3)あるものを経由する。なかだちとする。▽テレビを一じて事件を知る。(4)物事が長期・広範囲にわたる。▽生涯を一じての研究・全国を一じて雨が多い。
 - 14) 1つけこむ。つけいる。乗ずる。▽機に一。(2)降参する。投降する。▽敵に一。(3)一致する。あう。▽時流に一。(4)やどる。▽旅宿に一。(5)なかまにはいる。▽海賊に一。[2](1)なげ入れる。▽獄に一。(2)投げる。▽石を一。(3)つきこむ。▽資金を一。(4)あたえる。▽薬を一。(5)入れる。▽一票を一。(6)身を投げ出す。▽水中に身を一・社会運動に身を一。
 - 15) (1)音の高さ。音律。調子。(2)速度。▽話の一がのろい。(3)足の運びの速さ。歩調。(4)ボートのストロークの回数。(5)水泳で、腕のかきと足のビートの回数。(6)地学で、湾曲地層の傾斜。(7)歯車の歯の中心間の距離。ねじが一回転で進む距離。(8)航空機のプロペラの傾斜角度。(9)コールタールや石油を精製したあとに残る黒いかたまり。チャン。(10)「ピッチング」の略。▽ワイルド一。
 - 16) (1)すわる場所。席。▽座席(ざせき)・上座(じょうざ)。(2)人の集まり。集会の席。▽座興(ざきょう)・座談会(ざだんかい)。(3)星のあつまり。▽星座(せいざ)・乙女座(おとめざ)。(4)しきもの。物をのせる台。▽台座(だいざ)。(5)くらい。地位。(6)芸能の団体や劇場。▽座長(ざちょう)・一座(いちざ)。(7)ぎ。中世の商工業者の組合。▽材木座(ざいもくざ)。(8)江戸(えど)時代、貨幣をつくった所。▽銀座(ぎんざ)。(9)仏像をかぞえることば。
 - 17) (1)小さなしるし。ぼち。(2)小さなもの。▽盲点(もうてん)。(3)ことからの一部分。▽欠点(けつてん)。(4)めじるし。表記上の符号(ふごう)。▽訓点(くんでん)。(5)ところ。場所。▽地点(ちてん)・観点(かんでん)。(6)数字で、二本の線が交わる所。▽交点(こうてん)。(7)成績をあらわす数字や記号。▽得点(とくてん)。(8)衣類や品物をかぞえることば。
 - 18) 漢語動詞は動作を細分化して記述する語が多い。